

アメリカ人の旧ソ連認識 ——ケナンの場合——

李 景珉

米ソ間の対決で彩られた冷戦時代が終わってほぼ20年近くになる。1989年11月ベルリンの壁崩壊はその象徴的な出来事であった。翌12月、マルタで米ソ首脳会談が行われ、米ソは冷戦の終結を宣言するに至ったのである。そして、翌年10月、東西ドイツは統一を成し遂げた。相前後して、東ヨーロッパの共産圏諸国が挙って劇的な変化に見舞われた。

ヨーロッパにおけるこうした変貌は、東アジアに新たな流れをもたらすことにはならなかった。朝鮮半島の分断状況は依然として続いており、北朝鮮の核開発をめぐる米朝の対立は周辺諸国を巻き込んで持続している。

しかし、東アジアにおいてもヨーロッパの激流に比べるとその差は大きいものの、平和のムードが漂いはじめている印象は否めない。2000年6月に実現した南北朝鮮の首脳会談はそれを象徴的に表している。同年10月、米国のオールブライト（Madelaine Albright）国務長官が平壤を訪問、米朝は国交正常化の実現の直前にまで漕ぎ着けたかのようであった。

ところが周知のように、2001年に登場した共和党のブッシュ政権は従来の米朝関係の進展状況をすべて放棄し、北朝鮮に対し強圧的な態度を取り始めた。いわゆる第二次核危機の到来である。

ブッシュ政権は、北朝鮮を「ならず者国家」として糾弾すると同時に、武力で北朝鮮の体制を転覆させることを仄めかしたのである。折しもイラク戦争の最中であり、米国の「火力」を目の当たりにしていた北朝鮮にとってその脅威はひとしおであったに違いない。

その後、紆余曲折を経て、2003年8月北朝鮮の核開発問題を巡る「6

者協議」がスタートした。だが米国は、北朝鮮を直接の交渉の相手としては認めず、6者の中に北朝鮮を閉じ込めて屈伏を強いた。当然のことながら、そうした米国の強引な態度は北朝鮮との妥協を生むはずもなく、核を巡る問題は膠着状況を余儀なくされた。北朝鮮がこれまで半世紀間に渡り米国と直接対決してきたことを考えれば、一方的な「武装解除」に等しい要求を受け入れるはずはないのである。

6者協議は2006年10月北朝鮮が核実験を強行するまでさほど進展をみせることはなかった。米国が問題の解決に真剣に取り組まなかったことがその原因であった。北朝鮮が世界の非難を浴びながらも核実験を強行したことによってはじめて米国の姿勢に変化が現れたのである。

2007年1月ベルリンで行われた米朝協議において米国は従来の北朝鮮に対する頑なな姿勢を取ることをやめ、北朝鮮との直接交渉にはじめて臨んだのである。その結果、2月に開催された第5回6者協議は大きく進展し、北朝鮮の非核化のための「初期段階の措置」を共同声明として発表するに至った。同年10月には共同声明の実施のための第二段階の措置が第6回6者協議で合意され、北朝鮮の核問題は解決の方向に順調に進められた。6者協議とはいえども、協議の主役は明らかに米朝二カ国であり、議長国・中国の計らいもあって、米朝は具体的に問題の解決に身を乗り出したのである。

北朝鮮の核をめぐる問題は、米朝間の対立構図を鮮明に浮かびあがらせている。それは、冷戦時代の米ソ関係に極めて似ている状況ではないだろうか。当時の米国の対ソ政策は「封じ込め政策」(Containment Policy)に代表されるものであったが、朝鮮戦争の勃発後、それはソ連および共産圏全体に対してより一層強硬な「巻き返し政策」へと変化していった。

本稿において、われわれはソ連の勢力膨張に対して「封じ込め政策」で臨んだ米国の対応、さらにその立案者といわれているケナンの考えの背景を明らかにしていく。国務省の政策企画室長(Policy Planning Staff)としてのケナンの人となり考察すると同時に、彼のソ連認識の一端を彼の論文を通して捉えていく。そして、それを北朝鮮に対するブツ

シュ政権の認識と対応にダブらせて、推論することを試みる。

1947年7月『フォーリン・アフェアーズ』誌 (Foreign Affairs) に発表されたケナンの“X論文” (The X-Article) 「ソヴェトの行動の源泉」は後の米国の外交政策の基盤となったといわれている。ソ連を熟知していたケナンの認識を知るために、ここではこの論文を再読していくことにする。

2007年1月以降、米国が北朝鮮に対して従来の強硬な姿勢を取り止め、「共存関係」を模索するようになったのはなぜだろうか。ソ連を警戒しつつその壊滅までも視野に入れた米国の「封じ込め政策」は今日の米朝関係に如何に投影されているのだろうか、その接点を探っていきたい。さらに、今日の南北朝鮮の対峙を越える、平和な未来の構築に何らかの示唆を得ることを期待している。

1. ケナンという人物

ジョージ・F・ケナン (George F.Kennan) は1904年2月、米国中西部ウイスコンシン州ミルウォーキー (Milwaukee) に生まれた。彼の父方は18世紀初頭に北アイルランドからの移民の子孫であり、代々開拓農業を営んできた。ケナン一家は「頑固で口が堅く自意識が強い」人々であったようで、みな肉体労働や農作業に励み、貧しいなりに淡々と暮らしていた。また彼らは人種や肌の色、国籍などには無頓着で、マルクスがいう「古典的な社会的貧困」というものとはまるで無縁のものであったという。^{*1}

ところでその中から、彼の祖父のいどこに当たる人で一人例外的に他の職業についた人物がいた。ケナンと同姓同名でかつ奇しくも誕生日までが同じであるジョージ・ケナンという優れた外交官・歴史学者である。こちらの老ケナンは、『シベリアと流刑制度』という大著を著し、ロシア通として知られる人物であった。^{*2}

ケナンは幼いときに母を亡くし、家庭は裕福ではなかったようである。陸軍士官学校 (St.John's Military Academy) を卒業し、その後ウエスト

・ポイント（West Point）にある U.S.Military Academy に進学して職業軍人の道に進むことを希望したが、軍事知識と軍事訓練にあきたらなくなり、一般大学への進学を目指すことになった。^{*3}

1921年9月プリンストン大学に入学し、主に文学、歴史、国際政治などを学んだ。大学時代、彼は「粗野な中西部人」との自意識を強く持ち、恥ずかしがりやで人にもものを尋ねることもできないくらい、内向的な性格で目立たない存在であった。^{*4}

1925年夏、大学を卒業し、翌年外交官試験に合格して國務省に入った。研修期間を経た後の最初の海外勤務はジュネーブであったが、その地で外交官としての自覚をもつようになる。ヨーロッパでの生活を通して、彼は次第に視野をひろげると同時に、社会的責任感を覚え、内向的な性格も後退していくようになる。彼が副領事として正式に働いたドイツのハンブルクで、極めて貴重な体験をする。それは、ハンブルクは当時社会主義運動が盛んな港都であり、彼は「共産党員たちのデモ」をはじめて目の当たりにして衝撃を受けたのである。ケナンは「物々しく緊張した顔のみすばらしい労働者たち」が雨に濡れたプラカードや赤旗を掲げて行進している状況を、「これから時代はわれわれのものだと叫ぶ」彼らの真剣さを見て、「涙を流して感動した」と日記に記している。^{*5}

ケナンは外部の世界の観察に夢中になっていく。そして、これまでの自分自身を深く反省するようになる。これまで過ごしてきた平穏な日々を思い返し、受けてきた学校教育の限界を痛感し、もう一度勉学に取り組む意欲に駆られた。そして、國務省を辞めることを決心する。だが、國務省を辞職せずに外交官としての専門知識を身につけ、さらにはロシア語など選択する者の少ない語学の専門家になれる道があることを知り、ヨーロッパの大学の大学院で学びながら研修を受けることになる。ロシア語を選んだ理由は、アメリカがソ連とは国交がなかったこと、もう一つはケナン一家の老ケナンがロシア専門家であったことも彼のころのどこかにあったのだろう。^{*6}

1928年夏、ロシア語の特別訓練を志願したケナンはアメリカがまだソ連とは国交を持っていなかったため、ロシア語の訓練をその縄張りのバ

ルト三国で受けることになった。副領事の身分でエストニアの首都・タリンのアメリカ領事館に赴任したケナンは、領事館の仕事の傍らロシア語の個人教授を受ける。すでにドイツ語は堪能であり、ドイツの現代文学を中心に読書にも熱中していたが、時間があればよく旅にも出た。思うことをその都度ノートに書き留めたり、日記や旅行記を書くのが趣味であった。「掴み所のない」人間より、彼は風物をこよなく愛していたようであった。

1929年初めには隣国ラトビア・リガのアメリカ公使館に転動したが、まもなくドイツのベルリン大学の大学院に入学して、ロシアに関する総合研究課程で2年間学ぶことになる。当時西ヨーロッパの大学のなかでベルリン大学はソ連問題についてのもっとも優れたカリキュラムを設けていたからである。ケナンはロシア史、ソ連の財政、政治機構にとくに関心をもって研究したが、同時にロシアの文化的背景についての理解を深めることもできた。

そして、再びリガのアメリカ公使館に戻ったケナンは「ロシア」課に配属され、ソ連に関する調査報告書をまとめたり、研修で学んだことを生かしていくことになる。ソ連の定期刊行物やその他の出版物を丹念に読んでソ連の国内情勢を分析していたが、とくに経済情勢の動向に没頭していた。文学が好きであったケナンがチェーホフ全集^{*7}を読破したのもこのときであった。こうして、5年半にわたって、ケナンはベルリン、タリン、リガで修学研修の時代を過ごしたのである。なおケナンは、1931年夏、ベルリンでノルウェー生まれの女性、アンネリス・ソレンセン (Annelise Soerensen) に会い、同年9月に結婚した。

1933年11月、アメリカはソ連政府を承認した。米ソ国交の正常化にともないモスクワにアメリカ大使館が設置されることになる。ケナンは新任大使と共にモスクワ現地に派遣され、米ソ間で外交関係が開かれた直後の数年間をその地で過ごす。大使館事務所の設置、本国政府との通信など、すべての問題と関わりを持った。そして、アメリカ大使館に対する監視の目を光らせるソ連政府の対応に対処していたが、そのことを通じて、ケナンは「共産主義」の実態やロシア共産党に関して多くを学ん

だのである。1937年夏までケナンはモスクワで三等書記官として勤務する。

ケナンの仕事は専ら政治情勢の分析とその報告書の作成であった。丁度ソ連では肅正が進んでいた頃であり、新聞を丹念に読んだり、街の声、噂話などをできるだけ集めてはスターリン体制を系統立てて理解することを試みた。そして、彼は同時にソ連国内を可能な限り旅行することを怠らなかった。ロシア語を自由自在に話した彼は、ときにはロシア人になりすました。政府の監視の目を盗んでは人々に近づき、その暮らしぶりを見つめた。それは、ロシア人の生活の実態に直接触れてみたかったからであり、また彼がロシアそのもの、人々の生活、文化、顔、匂いに対する限りない愛着をもっていたからであった。彼はロシア社会の本当の姿を知りたい欲求に駆られていたが、実際、彼はロシア人やその大自然との接触を通じて深い共感を覚えることができたという^{*8}。

しかし、ソ連政府の見せかけだけの宣伝にはウンザリしていた。共産主義イデオロギーとは、所詮「人為的に作られた主役と悪役が出てくる似而非科学」としか彼には見えなかった。ソ連の指導者たちの勇氣、決意、および政治的態度の真剣さには敬意を表したものの、彼らの政治的性格の別の側面、特徴、例えば人間性の無視、残酷さ、無過失の誇示、日和見主義、真理を無視する秘密主義などに対して、彼は強い不信感をもった。ソ連社会の盲目的愛国主義、外国に対する疑い深さと嫌悪、外国人隔離制度もケナンにとっては耐え難いものであった。スターリン体制が存属する限り、米ソ関係は将来的にも当分困難であろうと考えたのであった。互いに誤解したり、双方の側に罪のなすり合いをすることは避けられないと思ったからである。

したがってケナンは、将来の米ソ関係については悲観的にならざるを得なかった。しかし、両国が親交を結んでいくためには、またそうした関係改善の希望をもつには、どうするべきだろうか。アメリカ側にとって大事なことは、何よりも「ロシア世界の複雑な様相に対して慎ましい態度で臨める人、なかならずく忍耐力の特別に強い人」を必要とするだろう。いまは何よりもそうした人材の育成に取り組むことが先決だとケナ

ンは当時記した文書を悲壮感が漂う結論で結んでいる。^{*10}

その後、ケナンは一時のワシントン勤務を経て、再びヨーロッパで過ごすことになる。1938年から39年まではブラハ、戦時中はドイツとポルトガルにも勤務した。そして1944年6月大戦の終結直前に、再びモスクワに転勤を命じられ、その地で大戦の終結を迎える。能吏ハリマン大使（Averell Harriman）の下で約2年間勤務して、戦争終結前後期における米ソ間の多難な対立状況を勤務地での現場の証人となった。戦時下のモスクワ市内を徘徊して観察した一般市民の困窮した生活ぶり、あるいはドイツ人捕虜たちの行列を目撃したことも衝撃的なことであった。また、彼はソ連政府がポーランド問題ではロンドンの亡命政府を敬遠しルブリン（Lublin）の共産主義者たちの組織を唯一合法政府として承認していく過程を目撃したのであった。連合国の勝利の前後におけるクレムリンの対応をつぶさに観察したことになる。まさにそれが後に彼をロシア専門家として一躍有名にする土台となったのである。ソ連滞在の長さ、ソ連社会の舞台裏を知っている点において彼の右に出る人はいなかった。実際、モスクワ滞在の長さでは西側の全外交団のなかでも彼はトップであった。

1946年2月、ケナンはモスクワを留守しがちなハリマン大使に代わって現場を仕切ることになった。本国政府に直接報告書を送付したり、また国務省の指令に対する見解を述べねばならない羽目にあった。ケナンは、これまで一年半の間国務省に対して数々の報告ないし提言を送ってきたが、まったくの「梨のつぶて」であった。全く、石にもものを言うも同然の状態が続いていたのであった。^{*11}

ところで、突然、アメリカ財務省からの依頼が国務省を通してモスクワに飛び込んできた。ソ連は世界銀行にも国際通貨基金にも加入する意思がないというが、ソ連政府のこうした態度の背景について大使館の見解を求めてきたのであった。そこで彼はこの依頼に対しては、いつもの通りいっぺんの返答を送るという対応を取らずに、「発奮して」「ソ連の脅威の性格」について述べた八千語からなる長文の「電報」を送信したのであった。^{*12}

電報の内容は、大戦後のソ連情勢の基本的な特質、その背景、その公的な側面、非公式な側面、そしてアメリカの政策へのインプリケーション^{*13}をも取り上げている。

國務省のスタッフの中にはソ連の実態をあまりよく知らない人が多いため、アメリカ人一般のレベルを考慮して、平易に、詳細に次のように述べた。ソ連政府や共産党は「資本主義との恒久的平和共存はありえない」と主張するものの、ロシアの一般市民は「外国に対しては友好的」であり、したがって平和共存はまったく可能である。資本主義の矛盾はいずれ戦争を引き起こすと宣伝しているものの、そうなるとは限らない。クレムリンの「神経過敏症的な見解の底にはロシアの伝統的、本能的な不安感がある」と言わねばならない。

続けてケナンは、国際政治の領域でのソ連の対応は主として、「スターリン政権の国内政治からの必要」にその根拠がある。それはスターリン自身の「独裁体制を維持する」ためにこそ、敵対する世界の存在が必要だとの見解を述べた。

こうした行動の根源をもっているソ連に対しては、西側陣営は政治・経済体制を強化していくことが有効であり、そのことによってソ連が挑戦する余地を与えず、同時にソ連が究極的にはより「ソフトな体制」になってくることを待つことだと指摘している。

さらにケナンは、ソ連は西側と比較すると依然として「はるかに弱体である」と述べている。アメリカはロシアと如何につきあうべきかという問題について、ケナンはまずアメリカ人はロシアの現実を知らねばならず、「わが国民がロシア情勢の現実についてもっとよく教育されるよう期待する」と指摘している。そして、「アメリカ社会の健全さと活力にかかっている」点は多くあり、「国際共産主義は、病気の細胞組織の上のみ繁殖する悪性の寄生菌のようなものだ。これこそまさに、ソ連の内外政策が直面している中心的課題である」「われわれ自身の社会の内部問題を解決し、われわれ自身の国民の自信と規律と士気と共同精神を高めることは、モスクワに対する外交覚書・共同声明に匹敵するほどの外交的勝利」となるのだと述べている。人間社会についてのアメリカ

の「方式と理念を固守する勇気を持たなければならない」とケナンは指摘して、ロシアの軍事的侵略の可能性を否定して国内体制を固めることを主張したのである。

ケナンの電文はたちまち大きな反響を引き起こした。何ヶ月たってもその反響が静まることはなかった。トルーマン大統領もそれを読み、すでにソ連に対し警戒的な姿勢を明らかにしていた海軍長官のフォレストル (James Vincent Forrestal) に至っては、それをコピーして軍の高官たちに配り歩いたのだった。無名であった国務省の高官の一人が、これまで抱いてきたソ連に対する認識を吐露したものが一気に注目されたのである。共産主義というものを全く知らないアメリカ人にとってそれは警鐘を鳴らすものとなったのはもちろんのこと、「孤独な」ケナンの生活を一変させてしまったのである。

1946年5月、ワシントンに戻ったケナンは新設されたウォー・カレッジ (National War College) の国際問題担当の副官に任命された。海軍長官で後に初代国防総省長官となるフォレストルはカレッジの運営に高い関心をもち、何かとケナンの相談役を務めてくれた。カレッジは軍事的、政治的な諸問題について、現職の軍関係者の訓練を行うための研修センターであったが、ケナンはそのための教育プログラムの作成、講義、講演、執筆に没頭することになる。彼の講義には軍関係の「生徒たち」は無論のこと、政府関係者、政治家、大臣、それに一般聴衆も殺到して、盛況であった。^{*14}

1947年3月、かの有名なトルーマン・ドクトリンが発表された。大統領はアメリカ議会の上下両院合同会議に出席して、「共産主義者に率いられた武装したテロリスト活動の脅威にさらされている」ギリシアとトルコに対して、「その国の独立の保全が中東における秩序の維持のために緊要である」と述べ、経済援助を与える権限を求めたのであった。^{*15}

ところでケナンは、この問題に関しては大統領の決定に対して異なる見解を持っていた。すでにカレッジの講義の中でギリシア危機の問題を取り上げて、「苦境にある国々を援助することが、いつもアメリカの利益になるとはとても考えられない」と考えていたからであった。そうで^{*16}

はなくて、むしろ「苦境にあるという事実はアメリカの行動を決定するとき考慮に入れねばならない基準の一つ」になるにすぎない。そして、援助はアメリカの「経済的、技術的、財政的能力の限度内」に限定すべきである。そして、こうした援助が実は「主たる狙いは軍事援助」であるにもかかわらず、アメリカ国防当局が自らに「有利な状況」をこしらえて、それを利用しているのではないかとの疑いをもっていたのであった。もっとも共産主義の脅威にさらされている国は、ギリシア・トルコに限らない現実を考えると、こうした介入が拡大される状況が今後増大していくことが十分予想されたのであった。

1947年5月、新任の國務長官であるマーシャル将軍（Gen. George Marshall）のたつての要請でケナンは國務省が新設した「政策企画室」（Policy Planning Staff）の室長に抜擢された。アメリカの外交政策の長期的目標を作成する、広範な政治・軍事問題の調査研究などを行うことがその任務とされた。それは、ケナンにとってもっともやりたく、またやりがいのある仕事であったので、ケナンにとっては望外の喜びであった。米ソの対立は段々エスカレートしていく状況でもあったし、まさにヨーロッパの情勢が極めて困難な状況にあってアメリカは如何なる対応をするべきかが問われていた時であった。

1947年7月号の『フォーリン・アフェアーズ』に「ソヴェトの行動の源泉」という論文が掲載される切っ掛けとなったのは、先の長文の電報が招いたことになる。ここ二年近くケナンの頭の中であって、文章にしたり講演で述べてきたものはソ連社会の本質を如何に捉えるか、アメリカはそれにどう対応するかであった。ところが、彼は國務省の現職であったため、一般雑誌などに論文を発表するには省内の手続きを踏まねばならなかった。論文の内容はむろん問題はないが、ただそれが雑誌に掲載される場合には筆者名は匿名の「X」とすることにした。

この論文が発行されるとアメリカの新聞・雑誌は挙ってその解説記事を掲載した。著者が誰なのか、それを特定するに時間はかからなかった。そして、ケナンは名声を手にしたことになる。ケナンの絶頂期であった。

2. 「X」論文の内容

論文はまずソヴェト権力が生まれた歴史的背景について論じている。そして、その政治的性格およびその実態を明らかにし、最後にアメリカの対応について言及している。約20ページのこの論文は後に、彼の代表的著書となる『アメリカ外交50年』(American Diplomacy, The University of Chicago Press, 1951)の中におさめられた。^{*17}

ケナンはソヴェト権力に固有な政治的性格は、イデオロギーと環境(circumstances)、すなわち権力を取り巻く外的要因とによって産み出されたものであり、イデオロギーとは現在の指導者たちが受け継いできた共産主義であり、環境とはロシア革命後今日までの30年の間に彼らが行行使してきた権力の環境だという。これらの二つがソヴェトの公式的行動を決定する要因だと捉えている。

ロシアの革命家たちは権力の掌握、すなわち敵対政権の打倒にすべてを集中していたために、革命を成し遂げた後の対応については、その後の政策については、「概して曖昧模湖」としたままであった。辛うじて産業の国有化、私有財産の没収だけが政策として予想されていたのであった。

革命直後の環境はむろん、独裁政権の樹立を必要とした。そして、内戦と外国の干渉があったからであるが、共産党による一党独裁、プロレタリア独裁を推し進めていった。特筆すべきことは、「アングロ・サクソンに伝統的な妥協」もなく、さらに「あまりに嫉妬深かったので」権力を分かち合うなどは考えられないことであった。それはロシア社会固有の「ロシア=アジア世界から身につけてきた」ものに他ならない。そして、すでに30年以上が経過したので、いまや国内は完全に「平定」されているわけであり、したがって「権力の独裁」を続ける理由は存在しないはずであった。しかし、旧態依然とした「独裁」を続けていくためには、外国の脅威を強調することが必要であるわけである。「資本主義による包囲と干渉の危険」が声高く主張されたが、それは軍隊と秘密警

察のような「圧力機関」の存続を弁護するためのものにほかならないのである。

そして同じ理由から、「資本主義世界と社会主義世界は根本において対立的なもの」「その人民」もまさに同じ境遇にあるとの共産党のテーゼが強調されている。外の世界からの脅威を強調することは、「外国の敵対行為が現実にあった」ためではなく、国内のソヴェトの独裁政権の存続を正当化させる方便となっている。

次にソヴェト権力に固有な政治的性格について言及している。ケナンはそれは基本的に本来のイデオロギーと何ら変わった点はないと捉える。ソ連は資本主義と社会主義の間には「内在的敵対関係がある」との考えを堅持しており、このことは「国際社会の一員としてのロシアの行動」にとって、深い意味をもっている。クレムリンの外交活動の特徴をなしているのは、「秘密性、率直さの欠如、表と裏の二面性、戦争の陰謀に対する猜疑心、敵対性」である。それらはソヴェト権力の内面的性質に基本的に結びついたものなので、何ら「変わる」ことはないだろう。このことは、「ロシア人が扱い難い相手」となることを意味する。

ソ連は、そのイデオロギーによって「目的の達成」を急いでいるわけではない。ロシア人は「無期限に闘争すること」を当然視している。ロシア人または東洋人の心の中で高く評価されるといわれる「慎重、用意周到、柔軟性および欺瞞」など優れた資質とされるものをもっている。「ソヴェトの外交を動かしている辛抱強い首尾一貫性」は、「ロシアの敵対者の側」がそれに「劣らないほど目的において不動であり、その適用において多種多様にして機略豊かな政策によってのみ有効に対抗できる」ことを意味していると指摘する。

したがって、アメリカの対ソ政策は、「ソ連の膨張傾向に対する長期の、辛抱強い、しかも確固として注意深い封じ込め」でなければならない。それは「外面的演技」、すなわち脅威を与えたと怒号と外面的「強硬さ」をみせることなどではない。ロシアの指導者たちは人間心理に対する鋭い判断力をもっている。ロシアとうまく取引する必須条件は、「如何なる時でも冷静に落ち着いており、ロシアが自らの威信をあまり損なわな

いで応諾できるような道を開いておくように、ロシアの政策に対する要求を提示することである」と指摘している。

ケナンはソ連の民衆の意識や経済・社会の実態について詳細に述べている。人々の間に「倦怠感と士気の低下」が現れていると、次のように指摘している。「民衆は肉体的にも精神的にも疲れており、幻滅し、懐疑的になっている」。そして、経済の一部の部門においては「発展」があるものの、アメリカと比較するなら「ひ弱い状態」にある。…政治生活には「大きな不安がかぶさっており」、上層部には危険な硬直化がある。ソヴェトの権力は「その内部に自らを亡ぼす種をふくんでおり」、すでに危険な状況に陥っているのかも知れないと捉える。

さて、こうしたソ連に対してアメリカはどのように対応したらよいか。アメリカはソ連を世界政治における「協力者」ではなく、「対抗者」だと考えていかねばならない。そして「その影響力と権力とに打撃を与え、弱めるように、慎重に、執拗に圧迫を加えること」を今や考慮に入れることだ。ロシアは「まだ遙かに弱い相手」であり、したがって世界の平和に対して挑戦してきた場合、アメリカは確固とした「封じ込め政策」でもって対処することである。アメリカは「世界の強国としての自覚」をもって、アメリカ社会は自分のイデオロギーを保っていけるだけの「精神的生命力」を持っているとの印象を広く世界にアピールしていかなければならない。そのことこそ、共産主義支持者たちに打撃を与えることになる。仮にもアメリカが「優柔不断や不統一や内部崩壊」を露呈することになれば、それは逆に「共産主義運動を元気づける効果」を与えることになる。米ソ関係の問題は、「本質的」には、アメリカがもっている「価値全体が試される」ことなのだ指摘し、アメリカ社会に警鐘をならしている。

ケナンは、マルクス主義者たちは、これまで権力を掌握することにすべてを集中してきたために、政権担当者としてのその後の社会主義政策の運営面における対応に関しては深く考慮したことがなかったと述べている。ソ連の場合、革命の後の社会主義への方策がほとんどで考慮されていない現実を指摘し、そのことがソ連の政治状況をより一層頑ななも

のにしてしまったと見ている。

もう一つは、ロシア人の国民的性格を強調していることである。例えば、アグロ・サクソンのように政治闘争において「妥協すること」をあまりしない文化ないし国民性であると述べている。まさに頑なな対応だけであり、一か八か、すなわち敵との闘いだけが存在する。この性格は共産党の組織に、「絶対に誤謬を犯さない」という観念、その鉄の規律にも根を下ろしているとしている。

最後に、ケナンは、アメリカ政府がしっかりと資本主義を保持していくことを強調している。アメリカの国民の生活がうまく行っていれば、人々は共産主義に惑わされることもなく、逆にそれはソ連を窮地に追い込むことになる。どちらの体制が幸せであり、勝っているのか、をめぐる社会体制間の競争をすべきと主張している。

ケナンの論調は、全体的にやや抽象的な印象を与える。イデオロギー一般に関する指摘は鋭くうなずけるものの、具体的な事例を示すことなしに論を進めている。それだけに、読者に誤解を与えかねないところが散在している。ソ連を「封じ込める」とはどういうことなのか、ロシア人の心のなかで高く評価され、優れた資質とされる慎重、用意周到、柔軟性および欺瞞などは、具体的に何を意味するのか。西側の情報がまったく遮断されているソヴェト社会に、西側の社会現象を知らせることが果たして可能だろうか。

ケナンは後に回顧録のなかで、この論文を執筆した状況について、「周到な準備」をしていなかったことを認めている。フォレスト長官に誘われ、「報告書的な感覚」でまとめられたものが、編集者の提案で後に日の目を見るようになったのである。その欠点については次のように触れている。^{*18}

まずひとつは、東ヨーロッパの衛星国についての説明がなされていないことである。ソヴェト体制はソ連国内だけに存在していたのではなく、周辺の国々に「またがっていた」事実を無視している印象を与えてしまった点である。

そして、次に重要な欠陥は、おそらくもっとも重要なことになるだろ

うが、それは「封じ込め」政策とは「軍事的脅威の封じ込めではなくて、政治的脅威の政治的封じ込めのことだ」、という点を明らかにしていないことであるという。使われていることばの表現も「どう見ても意味がはっきりせず、誤解を招きかねないものもある」と述べている。

最後に、ケナンは地理上の地域間の区別を明確にしなかったこと、「封じ込め」と言うのは、どんな場所でも必ず成功するもの、あるいはまた成功する必要があるものとは思ってはいなかったことを明確にしなかったことであった。

ところで、ケナンにしてみれば、この点については以前から「われわれの安全に絶対重要な地域とそうでない地域との区別がはっきりついていた」のであった。それは世界で五つの地域、すなわち、アメリカ、イギリス、ライン流域を中心とする隣接工業地帯、ソ連、日本に限られるのであり、それらの地域が「封じ込め」の主要な対象に他ならないのである。

ケナンの論文をめぐるのはリップマン (Walter Lippmann, 1889-1974) の批評がある。それはケナンがもっとも反論に困ったものであったが、リップマンは、「封じ込めというのは、ソヴェトの軍事的侵略が起こることを阻止することだ」という見解を示したのだが、ケナンはそうではないと次のように反論している^{*19}。

「ロシア人は他国を侵略することなど望んでいない。そういうことは彼らの伝統にはない。…彼らは、公然たる侵略に付随してくる公開の責任をとることを好まない。…私が政治的というときには、それは武力に関係はないと言っているのではない。しかしその武力は名目上は国内的暴力を意味し、国際的軍事力ではないということである。従ってそれは、言ってみれば、警察的暴力であっても…軍事的暴力ではない。

封じ込め政策は、この種の武力に対抗するために、他国民が抵抗してその国内の安全を守るよう力づける努力に関するものなのである。」

さらにケナンは、自分の論文はアメリカの「激しやすい右翼分子だけでなく、絶望にとらわれているリベラルな人々にもあてても、次のような信念が受け入れられることを願って書いたと述べている^{*20}。

「ソヴェト勢力の問題がたとえ不快なものであっても、そのために戦争が不可避だと言うことにはならない。戦争だけがその適切な対応策ではないこと、戦争を避けることは、われわれが闘いに敗れるかもしれないということではないこと、また政治的抵抗が可能な中間地帯があって、そこではわれわれには合理的な成功の可能性があること、などの信念がそれであった。事実、われわれはすでにその点では着々と成功を収めつつあった」。

以上のように、ケナンはリップマンに自分の考えを提示したが、彼の論文が巷で話題となっていたとき、ケナンはひどい胃潰瘍で苦しんでいた。どのように答えたらよいのか、まったくその術を見出せない状態だった。

確かに、ケナンは誰にも劣らず、スターリンがアメリカに突き付けてきている問題の邪悪さを知っていた。ロシア専門家であり、この点について彼が誰かに教示を受けることはあり得ないことであった。しかし、彼の論文は全般的には高い評価を受けたものの、叙述に関して言えば舌足らずの部分があり、それが誤解を招いたのであった。彼の純粋な平和思想に基づいた「解決方法」を疑う必要はなかろう。だが、冷戦時代のあのソ連に対する「封じ込め政策」とは何なのか、さらなる説明が求められた。

しかし、後に彼が述べているように「封じ込め」が意図したものは、われわれに困難な時機を乗り切らせ、この状況のなかに存在する欠陥や危険について、ソ連側と効果的に話し合い、そしてそのような状況の代わりに、よりよい、より健全な状態^{*21}を平和的に実現できるよう、ソ連側と準備をすることにあつたのである。

ケナンは、ソ連の指導者たちに対して、けんか腰でなく、決然と勇気をもって起ちあがれ、そうすれば、時がチャンスを与えてくれる、と言っていたのであった。しかし、当時のアメリカではケナンの主張を「ソ連に対する侵略的計画を覆い隠すものだ」とか、「積極性の欠如、あるいは消極性を攻撃する」指摘が出たのも事実であった。しかし、ケナンは自分の良識に従ってただ、米ソ関係は、本質的に国際社会におけるアメリ

カの価値全体が試されることになる外交政策の原則を述べたのである。

おわりに

第二次大戦が終結した直後、米ソ関係はそれほど刺々しく対峙していたのではなかった。ソ連とは「平穩に」やっていけるだろうとの楽観論が、多くのアメリカ人の中に広がっていた。昨日まで両国はファシズムに対して連合国として結束して闘ってきたわけであり、戦後世界に対する利害を追求する姿勢を露骨に表すにはまだ時間があつた。

しかし、「国益」を重視して、イデオロギー的に正反対の立場を取り始めると、対決の姿勢に転換するのに長い時間を要さなかつた。ケナンが指摘したとおり、ソ連の対応は不気味であり、かつ一貫性があり、それはアメリカの一部の人々を刺激せざるを得なかつた。ソ連という国を、総合的に、そしてその歴史や文化の多面性を熟知していたケナンのような人は極く少数派であつた。アメリカ人はソ連の東欧諸国への浸透に脅威を抱きだし、それは西ヨーロッパにも拡大されていくものと捉えた。後にマッカーシー事件がアメリカ社会を震撼したのはまさにそのためである。

北朝鮮をめぐる米朝関係の展開は、冷戦時代の米ソ関係に似たところがあるように思われてならない。邪悪なもの、理不尽さ、率直さの欠如、戦争の陰謀を企んでいるなどといった表現は、まさに当時のソ連に対するものと何ら変わらない捉え方となろう。だが、どうすれば対話が可能なのか、平和な共存への道を切り開いて行くには弱者ではなく強者が柔軟な姿勢を打ち出すしかないのではないか。ケナンの考えがその後のアメリカの実際の外交政策として力を発揮していったのかどうか、今後の研究課題として取り組んでいきたいと思う。

註

- * 1 George F. Kennan, *Memoirs 1925-1950*, Atlantic Monthly Press Book, 1967. p.5-7 (日本語訳は清水俊雄『ジョージ・F・ケナン回顧録(上)』)

読売新聞社、1973年、12-13頁。

- * 2 老ケナンは次のような著書を残している。George Kennan, *Siberia and the Exile System*, University of Chicago Press, 1958. この本の中にケナンは彼の経歴について一文を寄せている。Memoirs 1925-1950, p.9 (回顧録 (上)、13頁。
- * 3 ジョージ・ケナン (松本重治編訳) 『アメリカ外交の基本問題』岩波書店、1965年、xi 頁。
- * 4 回顧録 (上)、16頁。
- * 5 同上、28頁。
- * 6 同上、29頁。
- * 7 同上、52-54頁。
- * 8 同上、70-73頁。
- * 9 同上、72-74頁。
- * 10 同上、76-77頁。
- * 11 同上、196-206頁。ポーランド問題については、広瀬佳一『ポーランドをめぐる国際政治～冷戦への序章 1939-1945』勁草書房、1993年、参照。
- * 12 同上、278-279頁。
- * 13 George F. Kennan, *Memoirs 1950-1963*, Pantheon Books, New York, 1972. 回顧録 (下) 奥畑稔訳、321-334頁。
- * 14 回顧録 (上)、290-291頁。
- * 15 a Department of State Bulletin, March 23, 1947.
- * 16 回顧録 (上)、300-303頁。
- * 17 日本語版は近藤晋一・飯田藤次・有賀 貞訳『アメリカ外交50年』岩波出版社、2000年、岩波現代文庫版を参照。159-191頁。George F. Kennan, *American Diplomacy, Expanded Edition*, The University of Chicago Press, 1984, pp. 107-128.
- * 18 回顧録 (上) 337頁。
- * 19 同上、341頁。
- * 20 同上。
- * 21 同上、344頁。

※本論文は、2004年度 (平成16年) 札幌大学共同研究助成金による研究成果である。